

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02427

研究課題名(和文)人間形成論的バイオグラフィ研究の前提となる人間形成概念に関する理論的・経験的研究

研究課題名(英文)Theoretical and empirical study on Bildung concept in the "bildungstheoretisch orientierte Biographical research"

研究代表者

野平 慎二 (NOBIRA, Shinji)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50243530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：現代ドイツ教育哲学における「人間形成論的に方向づけられたバイオグラフィ研究」の前提となる人間形成概念に関して、(1)人間形成概念の規範性、(2)経験的現実との整合性という2点について、理論的検討を行うと同時に、ナラティブ・インタビューの分析と照合せながら検討した。(1)に関しては、「批判的反省性」が重要な条件のひとつとなることを明らかにした。(2)に関しては、インタビューにおける語りの社会的、言説的条件を解明することで、人間形成概念と経験的現実との架橋が可能になることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義として、人間形成概念の規範性の条件のひとつを明らかにできたことが挙げられる。また、人間形成の社会的、言説的条件の解明に社会学的概念を援用する場合の留意点と課題を明らかにできたことが挙げられる。本研究の社会的意義として、自己や世界に対して批判的、反省的に関わりつつ自己を形成していく過程として人間形成を捉える視点を提示できたこと、また同時に、いわゆる汎用的能力の獲得の際にも批判性や反省性という契機が不可欠であることを明示できたことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：In this research, (1) the normativity of the concept of "Bildung" and (2) its consistency with empirical reality, which is the premise of the "bildungstheoretisch orientierte Biographical research" in contemporary German educational philosophy, were examined in light of the analysis of narrative interviews as well as theoretical considerations. Regarding (1), this research found that "critical reflexivity" is one of the important conditions of the normativity of the concept of "Bildung". With regard to point (2), this research found that by clarifying the social and discursive conditions of interview narratives, it is possible to bridge the gap between the theory of and the empirical reality of "Bildung".

研究分野：教育哲学

キーワード：人間形成論 バイオグラフィ研究 ドイツ

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の学術的背景として、現代ドイツ教育哲学の主要な潮流のひとつである「人間形成論的に方向づけられたバイオグラフィ研究 (die bildungstheoretisch orientierte Biographieforschung, 以下 BOB と略記。)」における人間形成概念の不明確さが挙げられる。BOB では、経験的データであるバイオグラフィ・インタビュー(自分のこれまでの半生を自由に語ってもらう自伝的インタビュー)の分析を通して、人間形成の様相の解明が試みられている。この場合の「人間形成」とは、短期的な「学習」とは異なり、その学習の基盤ともなる自己と世界の関係の比較的長期にわたる変容を指す。BOB は、従来の現実離れした思弁的な人間形成論 (Bildungstheorie) と、人間形成の理念を問わないまま経験的現実の解明にいそしむ人間形成研究 (Bildungsforschung) の双方を批判的に克服し、経験的現実 に即した人間形成論を提示しようとする点において、大きな学術的、社会的な意義を備えている。

他方、BOB の前提となる人間形成概念にはいくつかの不明確さが残されたままである。例えば、BOB では、よりよい人間形成の基準についての検討が棚上げされる傾向にあり、いわゆる「悪い」方向への変容も人間形成と呼ばれてしまうことになるため、伝統的な人間形成論が備えていた批判的な意義が失われるのではないかという異論が出されている。また、BOB では、理論的には社会構造や言説といった外的条件によって主体のあり方が規定されると考えられている一方、経験的なインタビュー分析においてはもっぱら個人が自立性や批判性を獲得していく過程として人間形成が再構成されており、理論的な議論と経験的な分析における主体の概念が必ずしも整合的でない。

2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究では次の2点を目的とする。目的 1: BOB における人間形成概念の規範性とその根拠づけの可能性について検討すること。目的 2: BOB において経験的現実と整合的に結びつく主体概念とはどのようなものかを、ナラティブ・インタビューの分析の実際と関連づけながら解明すること。

3. 研究の方法

上掲の目的を達成するため、本研究では次のような方法を用いる。まず、目的 1 については、現代ドイツ教育哲学の BOB における人間形成概念の規範性をめぐる理論的立場を整理した上で、それぞれの立場の理論的根拠を明確化する。あわせて、それぞれの理論的立場と経験的なインタビュー分析の実際を照合しつつ、経験的現実 に即した人間形成概念の規範性のあり方を解明する。また、目的 2 については、人間形成の社会的、言説的条件を解明するための社会理論 (とりわけ P.ブルデューのハビトゥス論) を経験的なインタビュー分析に適用することの妥当性を検討する。それを通して BOB において前提とされるべき主体概念の特質を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 人間形成概念の規範性について

人間形成概念の規範性 (何がよりよい人間形成なのか) をめぐっては、J.-F. リオータルに代表される反基礎づけ主義の立場に立脚して、人間形成を「自己と世界との関係の変容」と捉えた上で、変容の実質的な善し悪しはひとまず棚上げする立場 (その代表は H.-Chr. コラー) 解釈学の伝統に依拠し、「批判的、反省的になること」を人間形成の実質的な規範性とみなす立場 (その代表は Th. フックス) そのつど直面する状況に対してインタビューが状況把握を行い、状況に対して態度決定を行う際に働く規範的判断 (反省的規範性) に着目する立場 (その代表は H.-R. ミュラー) に大別される。 と の立場はいずれも、研究主体 (インタビュアー) と研究客体 (インタビューイ) を区別する二元論的な研究姿勢を前提とした上で、インタビューの人間形成のあり方に対してインタビュアーが善し悪しの判断を下すものであるが、 はインタビューが行う状況のなかで下す規範的判断に着目するものである。

規範性に対する反基礎づけ主義的立場

コラーは、ドイツ教育哲学における古典的な人間形成論を踏まえ、人間形成概念を「危機の経験をきっかけとする自己と世界との関係の変容」と規定する。このことが典型的に見て取れる事例としてコラーがしばしば引用するのが、グローバル化した世界における移民の事例である。例えば、イラン人男性とドイツ人女性との間に生まれ、10歳の時にドイツに移住した女性カトリン (26歳) は、ドイツに移住した際、さまざまな困惑に直面した。その困難に対してカトリンは、最初は今自分が身を置いている文化に自らを適応させようとする戦略 (例えば、イランでは

ペルシャ語を話し、ドイツではドイツ語を話す)、次には周囲からそう見られているように(すなわちイランではドイツ人として、ドイツではイラン人として)振る舞うという戦略を取った。しかしやがて彼女は、国家(ないしは文化)帰属を基準としたアイデンティティの区分から抜け出し、2つの文化的特性を併せもつ新たな人格として自己理解するようになったという。

この事例は、危機の経験を通じた自己と世界との関係の変容という人間形成の理論モデルによく合致するものである。また、カトリンが到達した「二重の文化を備えたアイデンティティ」という自己関係、世界関係に対する価値判断は留保されている。カラーによれば、必ずしもすべての自己関係と世界関係の変容が人間形成と呼ばれるわけではなく、さらなる変容に開かれていることや、価値判断が対立する状況に正しく対処できることなどが人間形成の規範的な条件であるとされる。

批判的反省性としての規範性

フックスは、自己と世界との相互作用のなかで自己が世界から規定される側面のみならず自己が世界に対して主体的に判断し行動する側面を重視し、自己や世界に対して批判的、反省的になることを人間形成の規範性の条件とみなす。例えば、ドイツで生まれ育ったトルコ系の男性ハカン(22歳)は、小学校時代、ドイツ語能力が不十分で、学業成績も振るわなかった。実科学校時代にドイツ人の級友と隣の席になったことで学校に対する考え方が変わり、学業や出世への意欲が生まれる。ギムナジウム上級クラスに進学したものの、年配の地理の教師からは無視され、アビトゥアでは生物の教師から「人種差別的な理由で低い点を付けられた」ため不合格となり、「世界が崩壊した」。その後、専門教育のアビトゥアを取得する道を選び、現在は医療技術の分野に進むことを目指している。フックスによれば、ハカンはたしかにその人生のなかでさまざまな危機に直面してはいる。けれども、その危機に対して自ら対処しようとする主体性は、ハカンの語りからは読み取れない。小学校時代の学業不振は自ら努力して克服するのではなく家族に助けられて乗り越え、実科学校時代に学業や出世へのあこがれは生まれたもののそれに続く努力はなされず、アビトゥアの不合格をうけて現在は医療技術の分野に進むための勉強をしているものの、それは熟慮の末の判断というよりも易きに流された判断という性格が強い。これらのことから、フックスにしたがえば、ハカンにおいては批判的、反省的な態度が育っているとは言えず、ハカンの経歴を人間形成と呼ぶことは難しい。

反省的規範性の立場

ミュラーによれば、社会的、文化的実践のなかではつねに内在的な規範性が作用している。そのため、規範性への反省や評価を外から付け加えるのではないような人間形成論と人間形成研究との関係を構想することが重要となる。例えば、上でみた移民としてのカトリンは、ドイツにおける生活の「思うに任せなさ」に直面するなかで、その状況を克服する戦略を思い巡らし、その状況と折り合いをつけながら今日に至っている。同様にハカンも、ドイツにおいてトルコ系の子どもが遭遇するさまざまな困難を前に、そのつど対処法を考えながら人生を送っている。フックスの基準からみれば、それはたしかに「批判的、反省的」なものとは呼べないかもしれないが、別の観点からみれば、当人の「安易な」選択は当人自身の責任というよりも、当人が置かれた状況が当人にそのような選択をさせていると捉えることもできる。それゆえミュラーによれば、人間形成概念の規範性とは、社会的な基準に照らして自己が善い判断を下せるようになったか否かではなく、社会的な基準の妥当性の検討と、その基準を踏まえて自己が状況のなかで下した判断の検討の双方を視野に入れて解明されなければならない。

BOBにおける人間形成の規範性

以上のようなBOB研究における3つの立場を踏まえるならば、人間形成の規範性について、2つの示唆を得ることができるようになる。第一に、人間形成の規範性は、自己と世界との関係の比較的長期にわたる変容の過程のなかで、自己と世界との双方の規範性の相互作用として描き出されるべきものであること。少なくとも、インタビューの基準、あるいは社会的な基準をもとに、インタビューの変容の善し悪しを判断することは早計である。インタビューの判断基準は、インタビューが置かれた状況に規定されているものでもあり、その状況の妥当性を検討することも必要である(この点は、以下で述べる本研究の目的にも関連する)。第二に、BOB研究者は、自らの研究実践がもつパフォーマンスなレベルでの規範性にも自覚的である必要があること。BOBの研究成果は、論文や著書の形で公表され、読者に読まれる。その意味で、BOBの研究実践もある種の規範性を備えている。BOBが再構成した人間形成の様相は、一般化可能で普遍性をもつ理論というよりも、個別的、事例的で、読者の生に何らかの仕方で影響を及ぼす物語的仮説としての性格をもつ。BOB研究者は、自らの研究実践を何のために行うのか、そしてどのような発語媒介効果をもつのか、に自覚的でなければならない。

(2) BOBにおける主体概念について

BOBにおける主体概念の特質を解明するにあたり、自己と世界との相互作用、ないしは構造と実践の相互作用から主体が構成されるという観点のもと、BOBにおけるP.ブルデューのハビトゥス概念の受容を中心に検討を行った。ハビトゥスは、社会化の過程を通じて獲得され、身体化された、持続的な心的諸傾向のシステムであり、構造化された構造としての性格をもつ。同時に八

ビトウスは、社会的実践を産出する原理でもあり、構造化する構造としても機能する。ブルデューはこの概念を用いて、社会的行為にかかわる構造と実践のダイナミックな相互作用の描出を試みた。BOBもまた、人間形成を自己と世界との相互作用の出来事と捉えた上で、その様相を再構成し、人間形成の理論と経験的現実を架橋することを試みる。もっとも、BOBのアプローチに対しては、人間形成の出来事がもっぱら個人の自己アイデンティティの形成の次元において捉えられており、人間形成に関わる社会的、言説的条件 (gesellschaftlich und diskursive Bedingungen) が十分に考慮されていないという異論が向けられている。この異論に対する応答として、インタビュー分析に社会理論的なアプローチを組み込むことが試みられており、ハビトウスはそのための有力な方法概念のひとつと考えられている。本研究では、ハビトウス概念に着目するBOB研究者のうち、F.v. ローゼンベルクとL. ヴィガーの2人を取り上げて検討を行った。

ローゼンベルク

ローゼンベルクは、人間形成概念の再構成にとってハビトウスの概念が有益である理由として、以下の3点を挙げる。まず、ハビトウスは人間形成と同様に過程としての性格を備えていること。ハビトウスは個人の実践を方向づける原理であるのみならず、個人の実践を通してハビトウスもまた変容していく。第二に、既習のハビトウスと新しい環境や状況との不整合が人間形成の端緒となりうること。これは、危機の経験を契機とした人間形成という、コラーの理解と共通するものである。第三に、ハビトウスの多元性が人間形成の端緒となりうること。ひとりの個人は、複数のハビトウスを体得するが (例えば、階級、ジェンダー、世代など) それらは必ずしも調和的であるわけではなく、それらの間の矛盾が危機の経験となり、人間形成の端緒となる可能性をもつ。このような理解のもとで、ローゼンベルクはバイオグラフィ・インタビューをハビトウスの観点から読解し、()それまでの生活環境に違和感を抱き、新しい生活を模索する、()それまでに習得されたハビトウスと新しい生活環境との間に不整合が生じ、生活上の危機に直面する、()新しい自己解釈を模索する、()それまでの生活史に対して批判的、反省的に距離を取る、()新しい自己関係と世界関係が生じ、新しいハビトウスを獲得する、という5段階を経てハビトウスの変容としての人間形成が生じるとする。

例えば、ボッシュ氏 (男性、60歳) は、幼少期から教会の博愛精神を身につけて成長するが、次第に教会の教義に疑問を抱くようになり、18歳の時に教会から離れ、労働者のために生きたいと思い始める。人生にとって重要な問いについて考えたいとの思いから、大学では心理学を専攻する。大学卒業後は、心理ケアサービスの団体で働きながら、左翼政党の一員としても活動した。しかし、いずれの活動も内面的な疎外感を満たすものではなく、疎外感や喪失感のなかでボッシュ氏はうつ病を患うが、精神分析やスピリチュアリティに関する著書を読むことで精神の安定を保つ。そして、心理療法士の資格を取得した後、現在に至るまで、心理療法士として活動している。ローゼンベルクによれば、ボッシュ氏の人間形成は次のような過程を経て進行している。()教会という社会空間に疑問を感じ、労働者階級という新しい社会空間に関心をもち始める、()心理ケアサービスの団体や政党での活動を始めるが、いずれも実存的な意味の探求を満足させるものではなく、生活上の危機に陥る、()精神分析やスピリチュアリティの著作と出会い、心理療法を学ぶ決断を下す、()心理療法を学ぶ過程で、自らを、他人を助ける人としてのみならず助けを必要とする人としても捉えるようになり、新たな自己解釈が生まれる、()独自の心理療法を確立することで、実存的な意味の探求と他者へのコミットメントを両立させる、新しいハビトウスが獲得される。

ヴィガー

ヴィガーもまた、これまでのBOBがもっぱらアイデンティティの形成過程の解明にとどまっていたことを疑問視し、社会理論によって人間形成の社会的、言説的条件の解明を補完すべきであると述べ、そのような社会理論のひとつとしてハビトウスの概念に着目する。ただし、ヴィガーによれば、人間形成とハビトウスとの間には以下のような相違点も存在している。第一に、ハビトウス論は習慣性に重点を置くが、人間形成論は所与の状態からの解放の可能性や主観性の根本的な変容の可能性を想定する。第二に、ハビトウス論は決定論的な性格が強い (もっとも、実践の変化にともなってハビトウスも変化する場合はありうる) が、人間形成論は自己と世界との相互作用を重視し、実践による社会改革の側面にも着目する。第三に、ハビトウス論では社会構造が身体に刻印されることで生じる習慣性に焦点を当てるが、人間形成論では理性の可能性、知識や反省性の増加、自己決定の可能性の拡大に焦点を当てる。

このような前提のもと、ヴィガーはブルデューの『世界の悲惨』(1993)に登場するインタビューに人間形成論としての変容が見られるのか否かを検討している。第一の事例として分析されるのは、中学校の女性教師ファニー (48歳) のインタビューである。ファニーは学生時代に夫ベルナルと結婚し、その翌年に中学校の教師となった。ファニーは、やる気と熱意にあふれ、何よりも生徒のことを第一に考える教師であり、事なかれ主義の管理職や同僚、教職に理解のない保護者や地域住民に対して批判的だった。ファニーの生活の大半を仕事、生徒、仲のいい同僚が占めていた。このようなファニーをベルナルは受け入れることができず、2人は結婚後20年ほどで離婚した。ファニーは、自分がベルナルに息の詰まる思いをさせていたこと、ベルナルがしていたことに興味をもったことは一度もなかったことを語っている。また、離婚が2人の娘の心に大きな傷を与えたことにも深く後悔している。ブルデューによれば、ファニーの

人生とその語りには、教育や職業を通じた社会上昇、地位や任務への適合、承認を求める闘争といった特徴をもつ下層階級のハビトゥスを見出すことができる。ヴィガーは、職業生活や家庭生活においてつねに失敗が繰り返されてきたにもかかわらず、それに対してファニーが距離を置くことをせず、自らの理想にこだわり続けていることを指摘し、ファニーにおいて人間形成としての変容は見出せないとする。

また、第二の事例として分析されるのは、パリ近郊の高校に通うクレール、ミュリエル、ナディーヌという3人の生徒のインタビューである。3人はいずれも、中学校の時は成績優秀で学校生活に親しみを感じていたが、高校に入ったとたんに成績が急落し、学校生活に魅力を感じなくなったという共通点をもつ。それは、3人の通う高校がいわゆる学力エリート校であり、中学校の時には成績上位であっても高校に入ると成績が相対的に下がることや、その高校では成績による上下関係の意識が非常に強く、生徒に対する教師の態度も成績に応じて大きく異なることが理由であった。3人は高校や教師に対して強い不満やストレスを感じているが、同時に、そのような競争的環境への適応にはあまり意味がなく、自ら目標をもちそれを実現することのほうが有意義であることや、プレッシャーを受け流したり自分の考え方を変えたりすることのほうが大切であることについても語っている。ヴィガーによれば、両親の期待や学校の要求を拒否し、そこから距離を置こうとする3人の姿には、ブルデューが「教育熱心」や「順応主義」として特徴づけた中流・下流階級のハビトゥスとは別のものを見て取ることができる。すなわち、世界に対する反省的で主体的な態度決定が見られるという点で、3人の語りからは人間形成としての変容を見て取れるという。

BOBにおける主体概念とその社会的、言説的条件について

以上で取り上げたローゼンベルクおよびヴィガーのアプローチにもとづくならば、BOBにおける主体概念とその社会的、言説的条件について、次のような示唆を得ることができる。第一に、主体形成の社会的、言説的条件の範囲について。ハビトゥスの概念は、実践が構造によって規定されている様子と同時に、構造が実践によって変容する様子をも描き出すものであり、自己と世界との相互関係の変容としての人間形成概念と共通性をもつ。ただその場合、ハビトゥスないしは構造ということでは何が指し示されているのか、に注意を払う必要がある。換言すれば、研究者が見たいと思う社会的、言説的条件を都合よく拾い上げることのないよう、十分注意する必要がある。第二に、世界に対する自己の関わりについて。ブルデューのハビトゥス論は、実際には実践による構造の変革の過程を明らかにするというよりも、構造による実践の無意識的な方向づけを指摘することを通して、逆説的な仕方では社会批判を遂行する点に、大きな意義がある。また、ハビトゥスの変容過程においては、構造に対する実践の遂行は必ずしも批判的、反省的なものではない。これに対して、BOBにおいては、世界に対する自己の関わりはしばしば批判的、反省的なものと捉えられている。この場合の世界に対する自己の働きかけは、必ずしも社会や構造の総体的な変革を意図したものではなく、その都度置かれた環境に対する自己の反省的、主体的な関わりという観点から分析されることが多いが、その反面、決定論や適応主義との違いが不明瞭になるという困難も招き入れる。世界に対する自己の働きかけの反省性や批判性をどの程度の射程で捉えるのかが、BOBの課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 野平慎二	4. 巻 31
2. 論文標題 言語と人間形成：人間形成論的に方向づけられたバイオグラフィ研究の視角から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デルタイ研究	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野平慎二	4. 巻 70
2. 論文標題 経験的な語りと人間形成論をつなぐ：バイオグラフィ・インタビューの意味形象の再構成を通じた反省的・規範的人間形成論の探究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学研究報告 教育科学編	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野平慎二
2. 発表標題 経験的な語りと人間形成論をつなぐ：バイオグラフィ・インタビューの意味形象の再構成と反省的・規範的な人間形成論
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野平慎二
2. 発表標題 人間形成論的に方向づけられたバイオグラフィ研究と批判的ディスコース分析にみる主体形成
3. 学会等名 教育哲学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Thorsten Fuchs u.a.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Verlag Barbara Budrich	5. 総ページ数 364
3. 書名 Aufbrueche, Umbrueche, Abbrueche: Wegmarken qualitativer Bildungs- und Biographieforschung	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------